

七ツ釜

～天然の海蝕洞～

分野 自然
地域 唐津

◎地図・写真・統計資料など



(佐賀県庁HPより)

七ツ釜の駐車場から北の方の林をしばらく歩くと広い草地に出る。玄界灘に突き出た玄武岩の半島である。東の方に伸びる小道を進むと半島の先端、土器崎（かわらけざき）に出る。わきには神功皇后を祭神とする土器崎神社という小祠が祭られている。ここからの眺めは素晴らしく、東の浮岳から神集島、前方の玄界灘に浮かぶ島々が一望できる。半島を西の方に下ると、七ツ釜といわれる七ツの海食洞の上に出る。突端から下の海面を見ると、玄海の荒波が激しく海食洞に打ち寄せ、波しぶきが飛び散るさまが見られる。足元から海面まで、およそ40m、目がくらみそうな高さである。

玄界灘の方から眺めると、海面から40mの断崖絶壁に七ツの海食洞が並んでいるように見える。それぞれ奥まで穿っていますが、中央の海食洞が最も大きく、洞の間口3m、高さ5m、奥行きは110mもあり、満潮時には小船で中に入ることができる。また、貫通してトンネルになった洞もある。

七ツ釜の玄武岩は、表面に沢山の割れ目が入った六角形の形をした岩がいくつも集まって、丁度、ハチの巣状になっている。これは柱状節理ちゅうじょうせつりといわれるもので、溶岩が冷えて固まるとき、ひび割れして、ほぼ六角形の形になったものだと考えられている。「東のががら瀬」から、突端の土器崎を回り、北向きの七ツ釜を過ぎ、西側の象の鼻の先まで、海上から30～40mの高さで突き出た柱状節理の絶壁が続く。垂直に伸びたり、斜めに傾いたり、横にたなびいたり、崩壊しかかったものなど、溶岩の流出の過程を観察することができる。玄界灘に突き出た半島には、玄界灘の荒波が集中して打ち寄せ、その衝撃やエネルギーが、岩を砕き七ツ釜や絶壁を形成したものだろうといわれている。岩を砕く荒波の衝撃とエネルギーは、現在も衰えることなく続き、ハツ目の海食洞が形成されつつある。

この玄武岩の流出は県内でも新しく、新生代の第三紀の終わりころ（約2.1～3.6万年前）といわれている。それでも、初期に流出した玄武岩の中には風化の進んだものもあり、柱状節理が風化してタマネギ状の模様を呈しているところもある。駐車場から半島に通じる西側の道で観察できる。

ここは、玄海国定公園の1部にあって、地質鉱物として国の天然記念物に指定されている県内唯一のものである。

◎引用・参考文献（出典）

- ◆『佐賀の自然をたずねて』佐賀県高等学校教育研究会、理科部会地学部編
- ◆『ふるさと佐賀の自然』佐賀県教育委員会
- ◆『佐賀ハイクガイドブック』佐賀県体力づくり協議会
- ◆『唐津市の文化財』唐津市教育委員会（1997年発行）
- ◆『唐津市史』

◎エピソード・伝承・うんちく など

天然記念物 屋形石の七ツ釜（やかたいしのななつがま）：佐賀県ホームページより
神功皇后伝説を持つ土器崎の、高さ40mに及び玄武岩の断崖絶壁に、波の力により浸食された七ツの海食洞がある。中央のものは、間口、高さ共3m、奥行きは110mもあり、小船で中に入ることができるほどである。

この玄武岩の柱状節理は、傾斜したり倒れたりしているが、多くの柱が海中に没するさまは、ライトブルーの海とよく調和し、壮観である。

大正14年10月8日指定

唐津市湊大字屋形石

地質鉱物

龍の背（満潮の引き潮の時に見られる海底の岩肌） 調査中

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467